

01・突然ですが助けてください

〈シチュエーション〉

七月四日（木）十二時ごろ。

主人公と詩音が通う「音海（おとうみ）学園」の屋上。

サキユバスの血が目覚め、体調不良に苦しむ詩音が、主人公に助けを求めて電話をかける。

詩音の一人称は『私（わたし）』と『あたし』。

詩音の二人称は『委員長』と『いいんちよ』と、それぞれ二種類ずつある。

しかし、この使い分けに特に意味はなく、その時の気分や、前後のセリフに合わせて言いやすい方を選んで話している。

〈主人公〉

「もしもし？」

●【1】

■屋上にある、ベンチに座った状態で話す。

電話に出てくれた主人公に、何とか自分の病状を伝えようとする。

非常に久しぶりに連絡したというのに、優しい声で出てくれた主人公に胸をときめかせ『女神』『大好き』と思っている。

つまり、電話に出てくれただけで泣きそうなほど嬉しい。

だが、具合が悪すぎて、喜んでいる事がまったく伝わらない

「『非常に身体がだるくて重いが、何とか声を発している』という感じで。

極端にダウンナーに、けだるげな様子で。

しばらくはこのまま聞き手に一度、このような『クールで淡々としており、とても主人公に恋愛感情があるようには見えない』人物だと誤認させる」

……あの」

〈主人公〉

「……詩音ちゃん？」

●【1】

■名前を呼ばれただけで、心臓が飛び出しそう。

自分はこれから滅茶苦茶なお願いをするわけだが、『もしかすると、主人公なら聞いてくれるかもしれない』と期待してしまいそうなほど、主人公の声が優しい。

ちよつと泣きたくなる

「【ダウンナーで淡々とした中に、『ドキッとしている』『好きな人と電話して、緊張している』という感じを滲ませて。

ホツとしてちよつと泣きそうになっているのを抑えながら話す】

……あ……。

●※少し間をあけてから※ 話す

……うん。

●※少し間をあけてから※ 話す

私。

急にかけて、ごめん」

〈主人公〉

「どうしたの？」

●【1】

■ドキドキしながら切り出す。

本当はかけてすぐ切ってしまいたくなるほどの緊張と不安に襲われているが、どうにか
勇気を出す

「【必死で勇気を絞り出して、切り出す】

……あの。

●※少し間をあけてから※ 話す

【だが、謝罪から始めてしまう。

これから、あまりにも突拍子もない事をお願いするので】

……ごめん。

●※少し間をあけてから※ 話す

いきなりほんと、こんな事言って、ごめんんだけど……。

【※息遣いのみ※ で表現する。

『申し訳なすぎで、言葉にするのとはばかられる』という感じで】

……っ……。

【結局、遠回しな言い方から始めてしまう。

窮状は訴えつつも、具体的にはつきり言う勇気がない】

今凄……っ……困……っ……

〈主人公〉

「うん」

●【1】

「【ものすごく申し訳なさそうに】
その……」

〈主人公〉

「うん」

●【1】

「【今にも泣きそうな声で。

ダウナーで不愛想気味な声でありながらも、聴いている側が『これはまずい。ただ事ではなさそうだ』と感じとれるくらいに」

助けてほしい……」

〈主人公〉

「……もしかして、身体の事？」

●【1】

■主人公としても、かなり勇気を出して、覚悟を決めて切り込んでいるが、そんな彼女の想いには気づかない。

実は、主人公としては『自分は今、詩音の身体という、デリケートな問題に切り込んだ。自分からそうしたからには、必ず責任を取る』くらいの気持ちでいるのだが、詩音は『ああ、優しい。私がサキユバスだって事、ちゃんと覚えてくれたんだなあ』位の認識ではない

「【具合悪そうに、だが思わず笑ってしまう。

自分があまりにも凶々しいお願いをしている事が、おかしくなってしまったので。

いくら主人公が底抜けに優しく、自分がずっとそんな主人公に片想いしているからと言って、自分達は『身体の問題が起きたので助けて欲しい』と言えるような関係ではないので」

……はは……。

流石……委員長。よくわかるね。

●※少し間をあけてから※ 話す

【声のトーンに少し諦めが混じる。

『もし断られても、泣かないように心の準備をしよう』と思っている】
……うん。

その、『もしかして』……ってやつ。

● ※少し間をあげてから※ 話す

【気まずそうに、申し訳なさそうに。

『来た』 Ⅱ 『サキュバスの血が目覚める瞬間が来た』

……ちよつと。

とうとう…… 『来た』みたいで……」

〈主人公〉

「今、どこにいるの？ すぐに行くよ」

● 【1】

■ 主人公の反応に驚く。

主人公が優しいのはよくわかっているが、それにしたって『即答』『なんのためらいもな
リアクション』だったので。意外過ぎて心の受け身が取れない

「【完全に虚をつかれた感じで。

『驚きすぎて、かえって反応が薄い』という感じで」

あ……。

● ※少し間をあげてから※ 話す

えっ……と。

● ※少し間をあげてから※ 話す

■ 脳の処理がやっと追いつく。『どうやら、主人公は来てくれるらしい』『少なくとも、自分をとても心配してくれているらしい』と理解する。

それから、必要な情報を、やっと伝えられるようになる

【感動で、ちよつと泣きそうになって】

屋上に、いる。

ベンチのそこから、かけてる……」

〈主人公〉

「わかった。待っててね」

● 【1】

■ 今にも電話を切って走り出しそうな主人公に、慌てて確認をする

「【具合が悪く、心の中も混乱しつつも、何とか声を出す。

『嬉しいけど、ちよつと待って……！』』という感じで」

あ……！

● ※少し間をあげてから※ 話す

【恐る恐る、申し訳なさそうに】

……でも、いいの……？

●※少し間をあけてから※ 話す

【『そういう事』Ⅱ『自分の体調不良を抑えるための、粘膜接触を伴う性的な行為』
……その。お願いしたい事って『そういう事』なんだけど……。』

〈主人公〉

「……大丈夫。わたしキスもえっちもした事あるから、全然OK。手伝える」

●【1】

■突然の告白に脳がフリーズし、心が追い付かない。

平常時に聞けば『嘘、死にたい』『ピュアで清楚ですべての人に分け隔てなく優しい理想の女神様……だと思っていた主人公が、誰かとすでに経験済みだなんて、消えてしまったいほどシヨック』『でも、当然の事なのかも。主人公は人柄も容姿もこんなに優れているのだから。むしろ、その可能性を考えなかった私、あまりにも愚か』『それはそれとして消えたい』と『推しの熱愛を知って寝込むオタク』のような状態になっていた事だろう。

だが今は『一番つらい時に、一番好きな主人公が、自分に会いに来てくれる』『昔仲良くしていただけの、今は疎遠気味な同級生のために、身を挺して助けると言った』と

いう事実が嬉しすぎて『結果的に嬉しさが勝った』といった状態になっている

「※息遣いのみ※ で表現する。

様々な感情が混じりに混じった結果『混乱』だけが残る」

……っ。

●※少し間をあけてから※ 話す

「思わず笑ってしまう。

『大好きな主人公が、性経験という『言にくいだろう事』を、自分のために大声で教えてくれた』という事実に対する嬉しさと、電話口の主人公の真剣な顔を想像すると笑ってしまったので」

はは。

●※少し間をあけてから※ 話す

「泣きそうになりながらも、笑ってしまう。

主人公の優しさが嬉しいので」

そっか。

●※少し間をあけてから※ 話す

そうなんだ。

ありがとう……」

〈主人公〉

「何か必要な物はある？」

●【1】

■途方もないショックを受け入れ『自分のような下賤の民は、主人公が来てくれるという事実だけで満足するべき』『たとえ来てくれた後『やっぱり無理』と言われたとしても、泣かずに受け入れよう。もしそうなった後、自分がどうなってしまいかはちよつとわからないけれど……』と考える

「【声が優しくなる。】

実際は『ショックを受け入れている』『色々と心の準備をしている』のだが、聞き手には『多少不愛想具合が軽減された』と感じられるような感じで」

ううん……大丈夫。

必要な物とかは、ない。

ただ……いいんちよが来てくれたら、ほんとにそれでいい、から」

〈主人公〉

「わかったよ。すぐ行くからね！」

●【1】

「思わず泣きそうになりつつ、同時に笑ってしまう。

『大好きな主人公が、自分に『すぐに助けてあげる』という意味の言葉を言ってくれた』
という事実で胸がいっぱいになる」

……ありがとう。

……何（なん）か、かつこよすぎ。

●※少し間をあけてから※ 話す

【ダウナーで不愛想気味な中に、主人公への愛情がにじみ出ている感じで】
変わってないね……」

〈主人公〉

「そうかな？ とにかく、急ぐね。一回切る。

見つけられなかったらまたかけるから、スマホ見ててね！」

●【1】

「【思わず泣きそうになりつつ、優しく。

『この先どんな結果になっても受け入れよう、今の喜びを忘れずに生きて行こう……』
と考えている」

うん…：…待ってる。

待ってるね」

ここでフェードアウトして終了。